





龜遊堂近久梓

執刀肌彩俱利
伽羅三編大尾

上



A514
7

抑此草紙の近年東京の花と諸君も知る名も葭町より賣きし
 女伎客鐘吉の履歴は善事の多きれを好して鼠邊氏が
 勢ひ肌と号と置き合巻とる一たるは世君の高評と受しより
 梓注の層心喜て此圖を外さむサア三編をとり丁稚が尻に帆
 を掛て記者は責れど此程の傀儡話の際るしと受
 ぐ俵捨置の魚遊堂の氣をわらち年賀の戻り立寄
 色。僕の後巻を綴せよと望まむは断々く同様怪化
 の戲多者社會川上鼠邊氏が著述残しを夜仕事の片
 一寸一筆助手舞テ痴氣林翁の譲らまは獅子の鼻をヒッ
 ツカセ萬歳樂とボンくと序を

己ふる歳
をば春

夜宴坊國政戲題

たのし三二一

42-8300



生月三

梅園正一郎文章



幸さふ必らさ味ひ
 甘き子
 果て毒
 つつと名まれば
 見雷也の鐘吉の
 寝る人々を尻
 眼よりけしむる
 ま煙草不怖と
 こそお笑なごう
 正のあのお初方を
 也の澄るが圓形子
 次とてお呉といふ
 鐘
 一寸壺と云
 次とてお呉といふ

九三



是より以下
鐘吉が川清
へ譚りと見
給へり

鐘吉の舟
連を来りしも
是の舟のつら

あけまへ
まはるる
て「舟あよ
かぜらくを
さうに今日
さうに今日

あけまへ
まはるる
て「舟あよ
かぜらくを
さうに今日
さうに今日

鐘



あけまへ
まはるる
て「舟あよ
かぜらくを
さうに今日
さうに今日

あけまへ
まはるる
て「舟あよ
かぜらくを
さうに今日
さうに今日

あけまへ
まはるる
て「舟あよ
かぜらくを
さうに今日
さうに今日

鐘

つぎあはれ
せらるのほが
群麗あはれ
あはれ
はみをと
て
清き白今
申らざる
張合
強くも入れわ
今は何と色と
あ名のよ



の
は
の
切れ
切れ
切れ
切れ
切れ
切れ
切れ

今の
今よ
さ
る
際
際
際
際

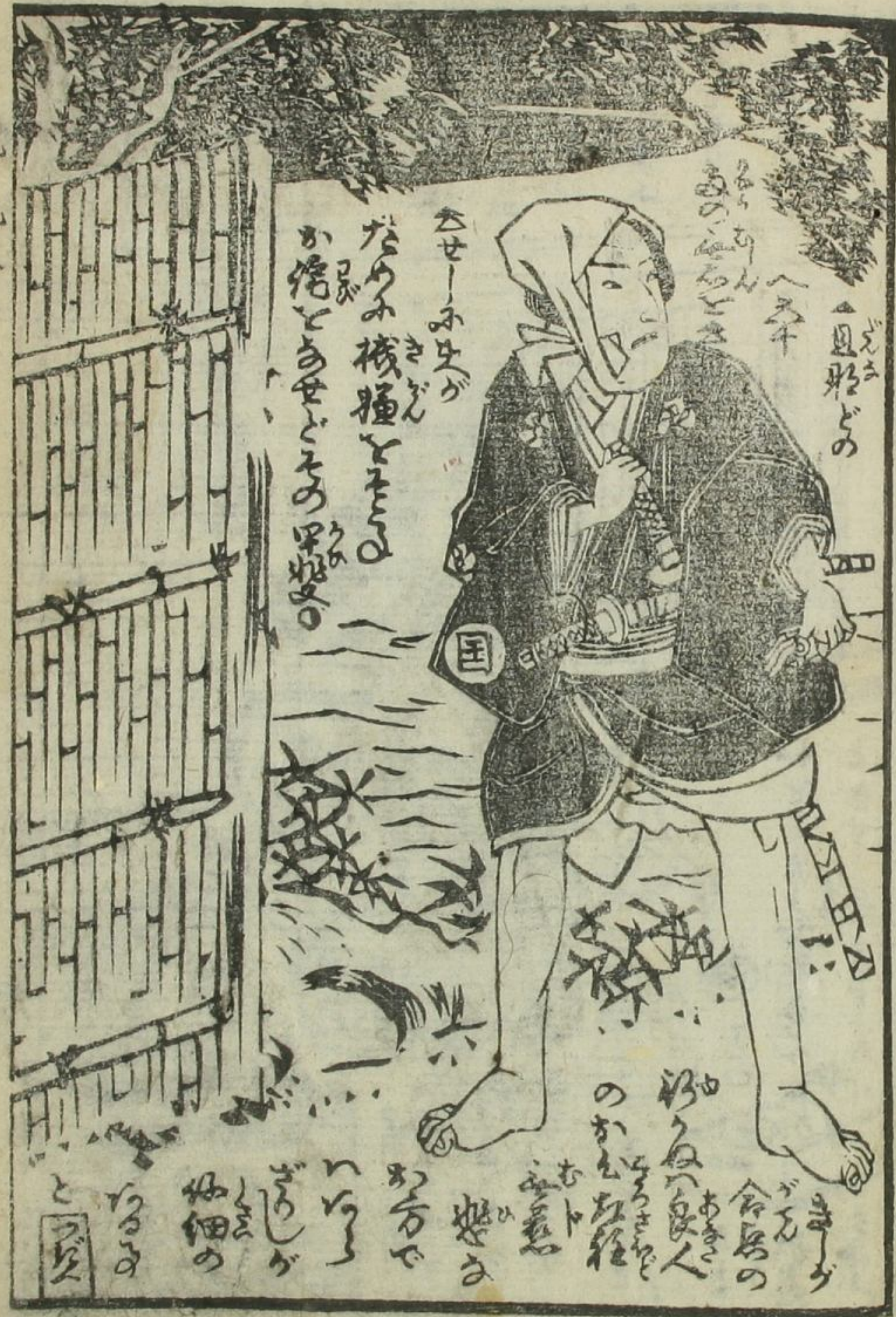


の
の
の
の
の
の
の

この
の
の
の
の
の
の



の
の
の
の
の
の
の





九のし三

白梅の国三上野車
坂つて不計兄正郎
逢ハ密談と云ふ
事春中つてもあつ
うらさる

つさるると
やらん
とん
うらさる
いん
かくまひ



うらち笑し
「酒ハまじり
存トあぢや
ふさふさ
先生
梅の
大初
なま
中央白梅と



白梅の国三上野車
坂つて不計兄正郎
逢ハ密談と云ふ
事春中つてもあつ
うらさる

うらち笑し
「酒ハまじり
存トあぢや
ふさふさ
先生
梅の
大初
なま
中央白梅と

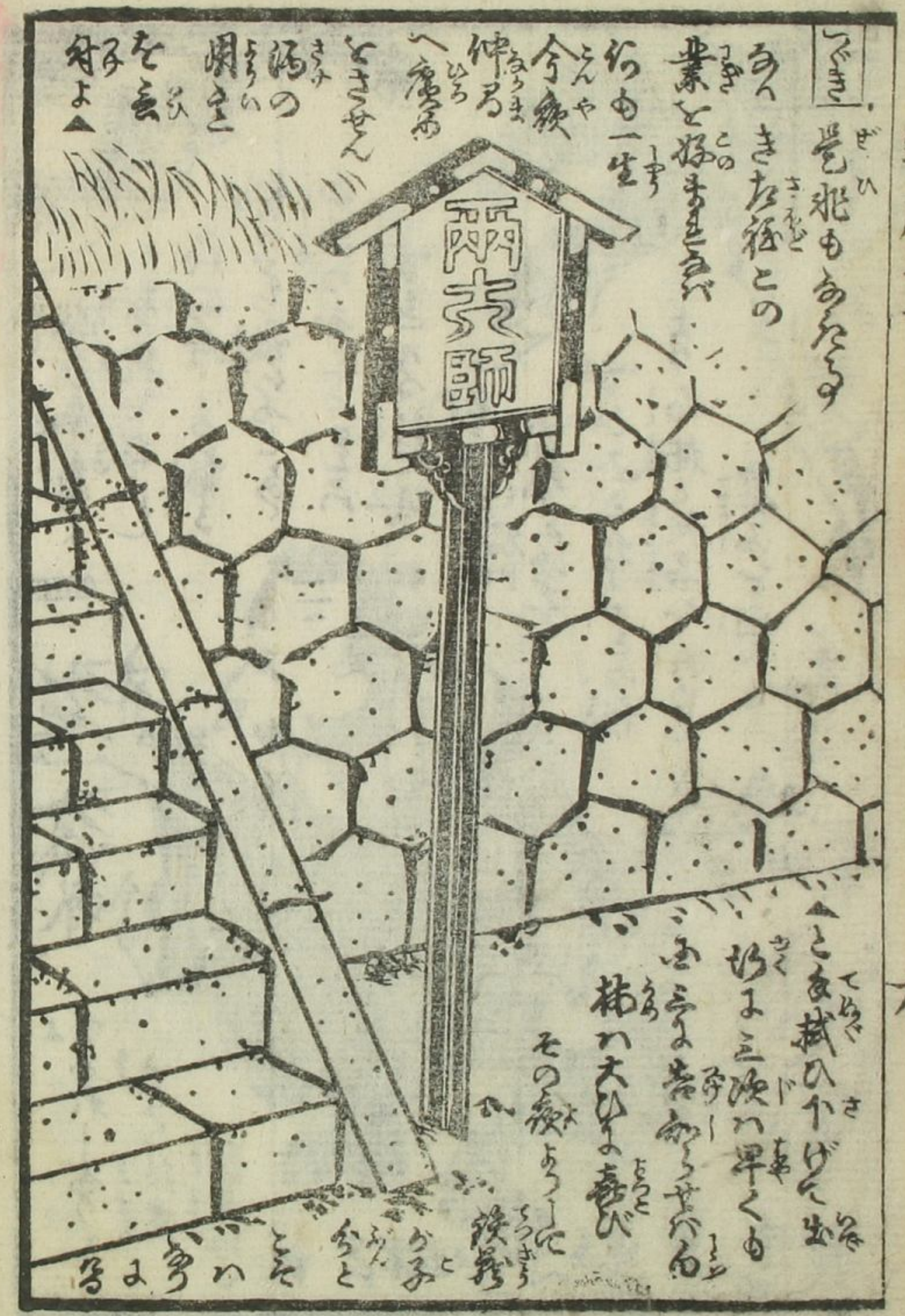
出版人

編輯

日本橋區
龜井町廿六番地
澤 久次郎

本所區
元町廿五番地
川上 謂一郎

明治十三年四月十九日御届



010190517581





ASIX
8

○ 初々幕 勢 慶 森 公
 六 穢 勢 朝 へ 返 綱 世
 六 総 督 上 へ 有 様 御 願 儀
 寓 小 向 向 向
 市 中 危 有
 又 あり あり
 あり せ 猶 も
 本 意 幕 后
 警 備 軍
 と 事 入
 上 皇

▲ 志 志 志
 あり 多 白 柿
 の 小 二 一 下 口
 核 煙 山 山

西 国 橋
 全 委
 来 へ
 か へ
 折 向 向 向
 四 人 の 宿 軍
 が 姓 末

開帳



498-8301



つぎせぬーと
 張ひちぢ
 け方どぎ
 て来るまぬ
 をゆーと
 小いひさ
 とさた
 ある官軍
 へ突ありて
 挨拶もささ
 けさる官軍
 へま止あり

▲角直中よひひろふ
 性思を懸るるの
 あたやうか
 何心も
 云ふたありしぞ
 その上ありて一

●せむ
 礼とも不
 法とを
 まさやう
 あたぬ
 や付
 留ま
 笑ひ「是のまうり



希はちの音人
 あや夜中
 さまの元

の挨拶の

か感あさる
 けちさうし
 互ひの麻
 雁へちて我
 のとあらざ又
 不法とわ
 武士の
 ま中と
 右末よりの
 あらやそ
 何ぞや
 光りとあつ

切ぐれ
はとをく
ありと白
挿し波方
は方とち
遠ひま
をさへ
がらま
まうと
まの南
例ま
とほ



御有る神切
早と一
切ぐれ
はとをく
ありと白
挿し波方
は方とち
遠ひま
をさへ
がらま
まうと
まの南
例ま
とほ

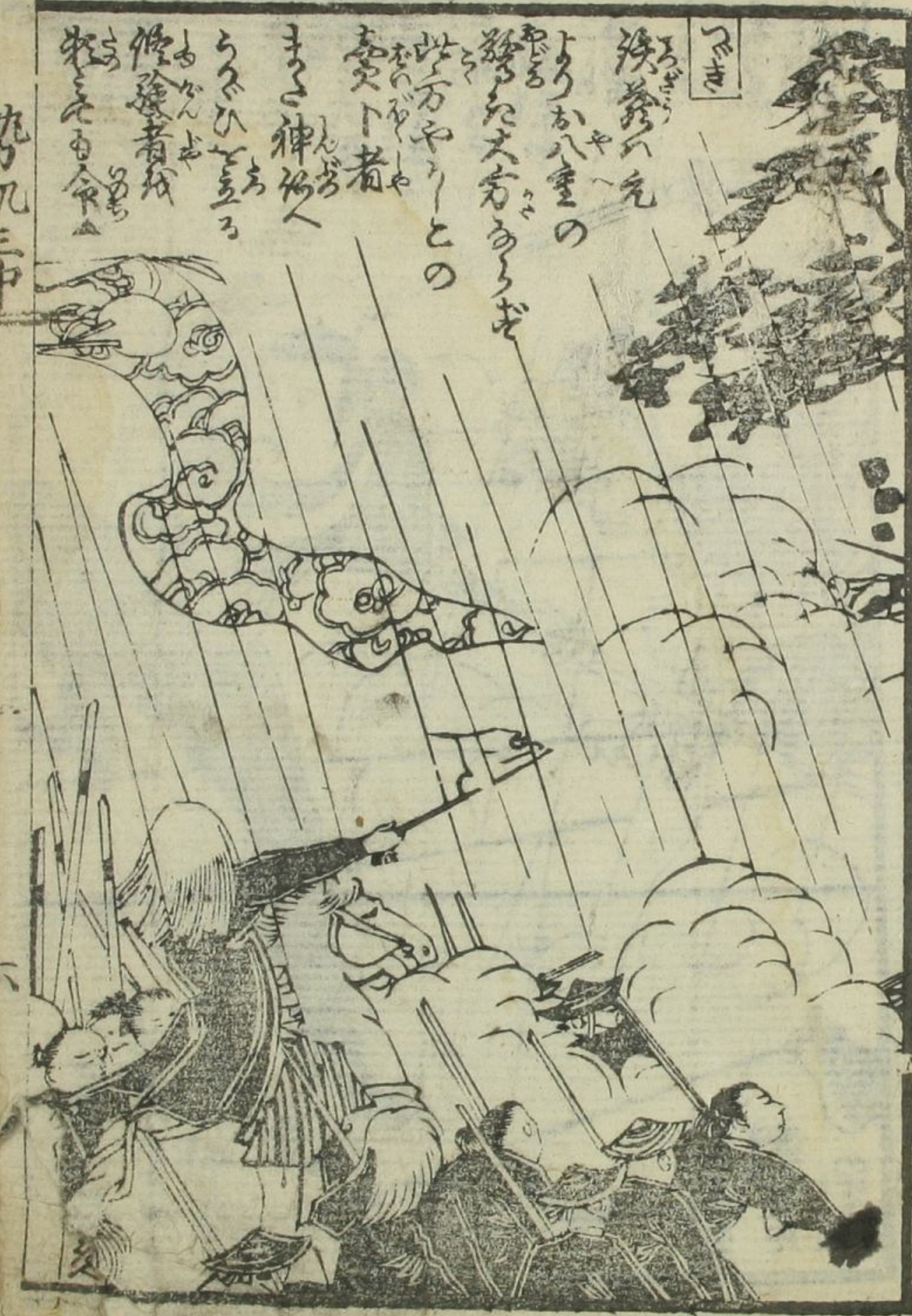
り又も切
とむ一
をかひ
て遊
バウンと
りふざ
伏ま
ひるま
りの人
ろた根
遊
骨と



は方よ
例
人の
ぎれ
ありと
長
さ
備
命
喉
り



▲この柳うつがまゝ一合の
 きたるまゝのちりぢりな丸
 の場合あり想とどやが
 ぬけり来るまゝん附せり
 けりとのまゝありお八重の
 まが丸死とつた



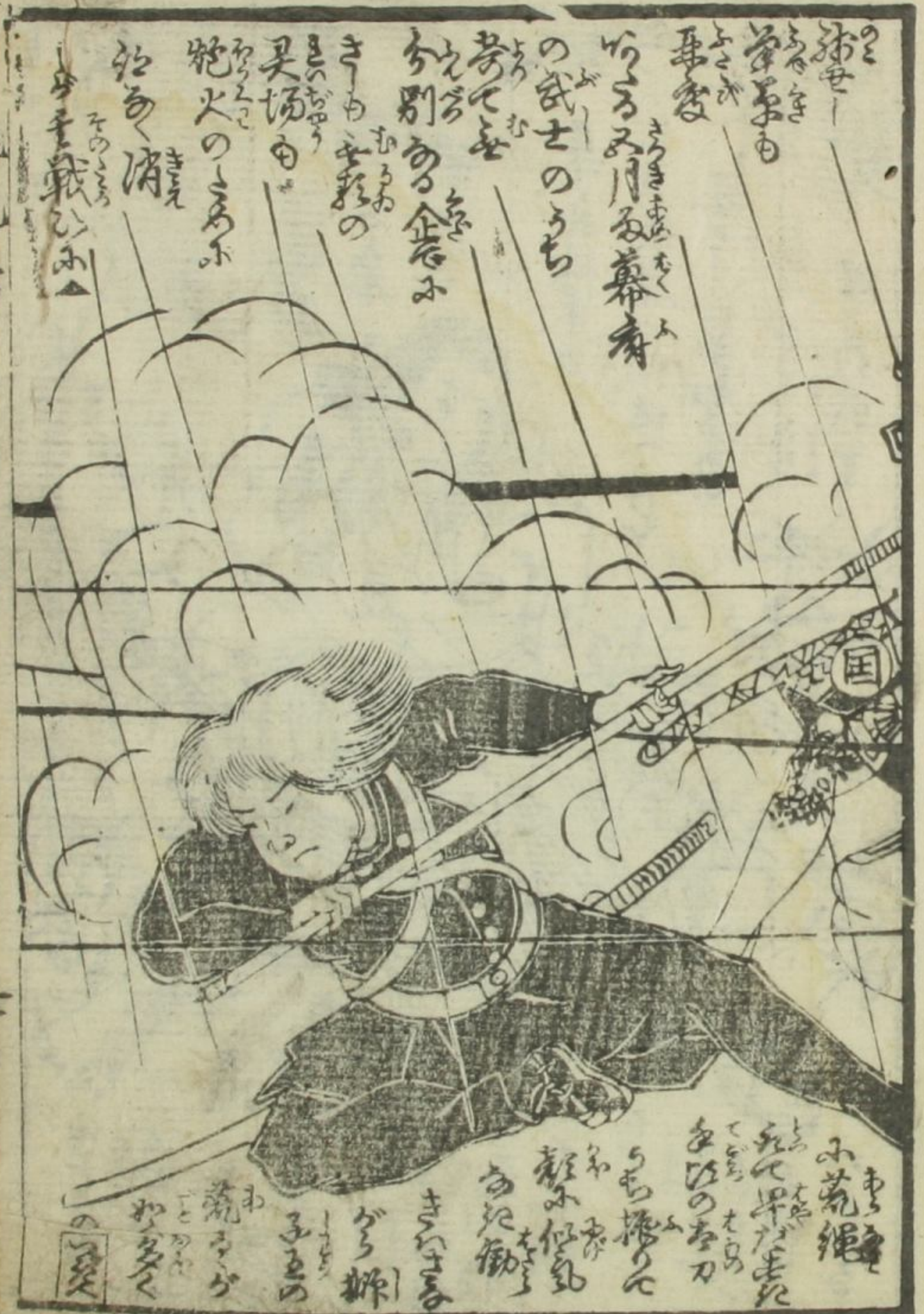
つま
 洗髪元
 上りか八重の
 勢をた大方ありぞ
 此方やりとの
 突つ者
 まゝ神人
 らんひてまゝ
 修験者
 勢も命



つぎの
 如く
 する
 病ひの
 打
 強者
 長
 と

▲幕士の
 十九
 二十
 一人

去
 車
 の



の
 幕
 の
 武
 別
 火
 消
 身

小
 花
 花
 子
 子
 花
 花
 花



幕兵役軍の
 なる彼者へ何地へを
 隠せしめあつるもの
 絶えたりなる
 然るに戦争

つき官軍

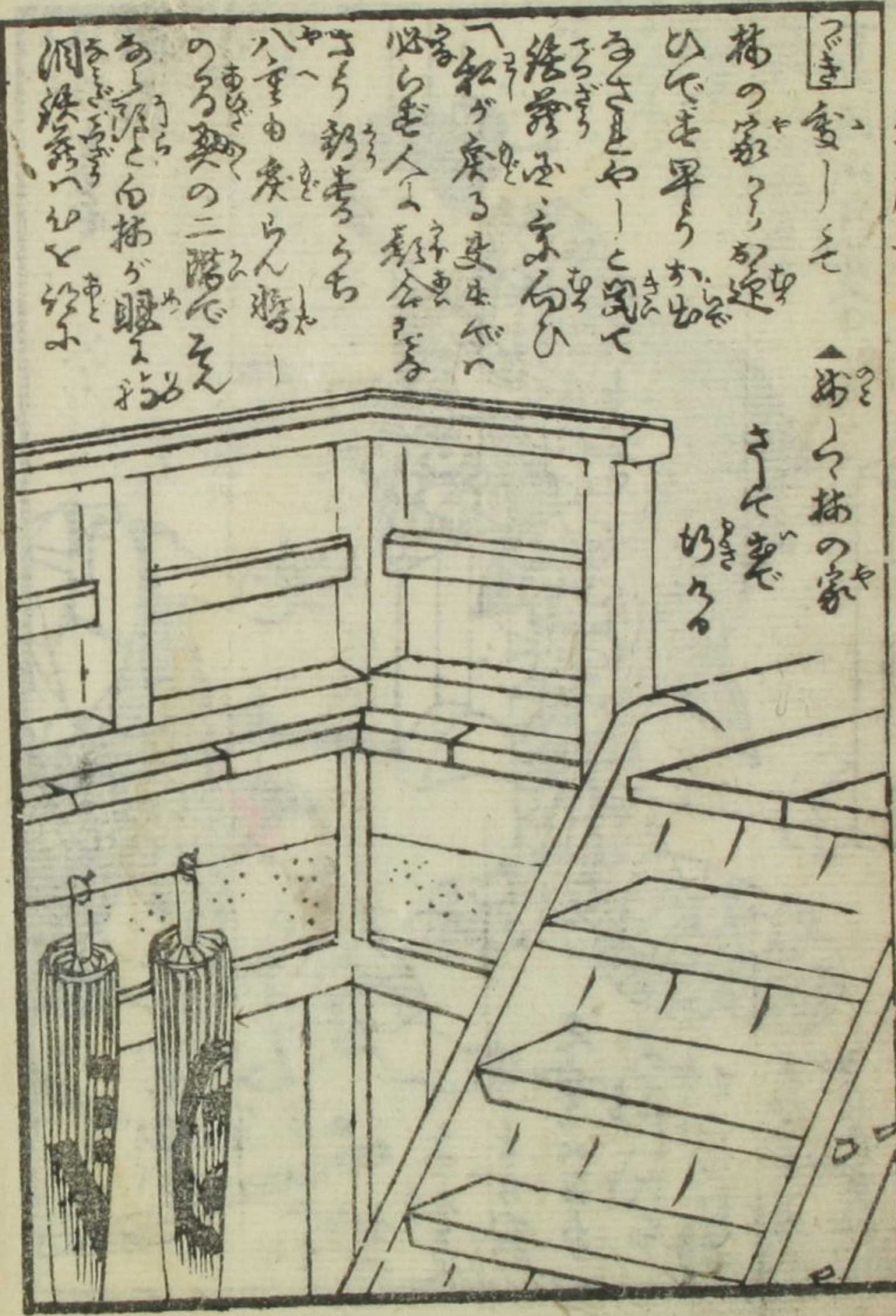
妻よま
 何を
 せし
 武士
 ありし
 世に
 ありし
 世に
 ありし
 世に



まじく
 は組棟索
 ちとどきとと人者さ
 其のほよとせしむる
 茶釜の海霧へのの松の棟索よ
 まつふとが家出せし由の恩を
 持て義隊は組一戦とす

の海へ
 車つるなどとはの家
 と月面み

本
 又先
 客
 今
 悪
 次



べき舎一とそ
 柿の家より近
 ひでま早うか
 るてはや一と
 落着かまふひ
 一松が度るま
 必ら老人の
 さう新考ら
 八重由度らん
 のろ契の二階
 ろうと白柿が
 洞鉄のいと

柿の家
 さへ
 好る

010190517590





歌川國政画





公より父君が
 採竹あり
 逃げ振刀我
 さる後へ区ま
 せよと一ひ
 正家のまほ能
 両方まご
 婦人小な果
 つま又と
 ちりぎる程と
 持好むるよ
 云あうあ

△麻とつ
 なる歩はさ
 又組へ加え
 明之院小豆と止め
 一ふ去ゆる五月十日
 女軍まふふ切是とあり
 火花とちじ戦ひが
 けり上世老兄
 一ふさ
 けり
 と戒
 の源



るさ
 暮舟
 慶之の手
 浪よき

△の
 程もの
 身小まや
 官軍と喧嘩
 せし折は
 受方時流ふの
 受さあて
 武まよゆんとあふ



「南」コリヤ路あり
面圓のしつと
極の北はつらぬ
一柱のさきへ
史の後のかたは
比の持をよるを
君の遠をよるを
理を妻とよるを
迷惑をよるを



三月三



八
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十



十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

Handwritten text in a medieval script, likely Latin, arranged in several columns. The text is written in dark ink on aged, yellowed parchment. The script is dense and appears to be a form of Gothic or similar medieval hand. The text is positioned above a large illustration.



Small handwritten text or a signature located at the bottom left of the page, below the main text block.

Small handwritten text or a signature located at the bottom right of the page, below the main text block.